

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：特定領域研究

研究期間：2005～2009

課題番号：17063004

研究課題名（和文）セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究

研究課題名（英文）Comparative Studies on Burial Practice of Ancient Semitic Pastoral Nomads.

研究代表者

藤井 純夫 (FUJII SUMIO)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：90238527

研究成果の概要（和文）：本研究計画の最大の成果は、1) 西アジア=セム化の第一波となったマルトゥ・アムルの墓域を、その原郷と言われてきたビシュリ山系で初めて特定したこと、2) 墓域造営単位の通時的組成分解を通して、遊牧民社会に固有の分節的社会構造の成立過程を明らかにしたこと、である。これによって、セム系部族社会の歴史的・構造的源泉であった青銅器時代遊牧民の社会動態を具体的に復元する手がかりが得られた。

研究成果の概要（英文）：The primary results of our research project on the northwestern flank of Mt. Bishri include: 1) to have specified archaeological footprints of pastoral Mar-tu/Amurru who triggered the *Semitization* of the ancient Near East; and 2) to have traced the formation process of their multi-layered social structure through the diachronic composition analysis of their cemetery. These findings have contributed to reconstructing the social dynamics of Bronze Age pastoral nomads who served as a historical and structural source of ancient Semitic tribal communities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	4,900,000	0	4,900,000
2006 年度	6,700,000	0	6,700,000
2007 年度	6,600,000	0	6,600,000
2008 年度	6,600,000	0	6,600,000
2009 年度	5,100,000	0	5,100,000
総計	29,900,000	0	29,900,000

研究分野：西アジア考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：セム系、部族社会、遊牧民、墓制、ビシュリ山系

## 1. 研究開始当初の背景

セム系部族社会の形成過程に対する関心は、近現代における中東理解の齟齬とその反省の中から生まれた。しかし、この問題へのアプローチには、多数の障壁が立ちはだかっていた。第一に、中東世界のセム化は青銅器

時代前半の出来事であったため、粘土板文書研究を含む歴史的アプローチが困難であったこと。第二に、先史遊牧民の考古学的不可視性 (archaeological invisibility) のため、考古学からのアプローチも容易でなかったこと。第三に、部族制それ自体の確認・検証が、文献史学にとっても、また考古学にとつ

ても、難題であったことである。

そのため、セム系部族社会の形成という問題自体の重要性は十分に認識されていながら、具体的なアプローチはほとんどなされていなかった。テーマの特異性・境域性が、それを阻んできたのである。

## 2. 研究の目的

セム系部族社会の形成過程を、青銅器時代遊牧民の墓制面から追跡すること。それが、本計画研究班の主たる研究目的である。青銅器時代の遊牧民を研究の対象に選択したのは、彼らこそがセム系部族社会全体の歴史的・構造的源泉であったと考えられるからである。また、墓制に着目したのは、それが先史遊牧民の実像に迫るほぼ唯一の考古学的手段だったからである。

具体的な目標は、三つ。第一は、マルトゥ・アムッルの考古学的足跡を特定することである。それが出来ない限り、研究は始動しない。

第二は、彼らの墓域組成の解明である。一つのケルン墓群は、どのようなグループに分解できるのか。また、最下位のグループから上位グループへと逆にたどることによって、墓域造営集団の社会構造をどこまで復元できるのか。

第三は、そうした墓域組成の形成過程である。この点を明らかにすることによって、遊牧民に固有の分節的社会構造の成立経緯を解明できるであろう。

要するに、青銅器時代遊牧民の分節的社会構造の成立過程を通して、「セム系部族社会の形成」にアプローチしようというのが、本研究班の研究目的である。

## 3. 研究の方法

セム系部族社会の形成過程を解く鍵は、新石器時代の後半から前期青銅器時代にかけて成立した初期遊牧文化にある。しかし、西アジアの考古学的調査は都市・農村遺跡に大きく偏っており、初期遊牧民遺跡の調査事例はきわめて少ない。なぜなら、集落を形成せず、遊動生活を送る初期遊牧民の遺跡は、容易に捕捉できないからである。仮に捕捉できたとしても、出土遺物が少ないので年代決定が困難という事情もある。そのため、セム系部族社会の原点とも言うべき先史遊牧民の社会構造は、今もって明らかになっていない。唯一の手がかりは定住社会側の文字記録であるが、それには自ずから限界がある。

そこで本研究班が着目したのが、彼らの墓制である。集落を形成しない遊牧民も、墓だ

けは造る。しかも、視認性の高い石積み塚(ケルン墓)を造る。従って、墓制面から彼らの動向を探ることは、十分可能であろう。墓域は氏族・部族単位で造営されることが多いので、部族制社会の形成過程を追跡するには格好の資料となり得る。

このような方法論的展望の下、三つの調査フィールドを設定した。第一は、シリア中部のビシュリ山系である。ビシュリ山系は、西アジア=セム化の第一波となったマルトゥ・アムッルの故地と言われてきた。ただし、それは粘土板文書中の間接的示唆に過ぎず、考古学的な証拠は伴っていなかった。調査では彼らの具体的足跡、すなわち青銅器時代遊牧民の墓域を探査し、墓域組成を精査した。

他の二つのフィールドは、ビシュリ山系青銅器時代ケルン墓群の編年的・地理的位置づけを、より広い文脈の中で確認するために設けたものである。そのうちの一つ、ヨルダン南部のジャフル盆地では、以前から青銅器時代ケルン墓の調査を重ねてきた。今回の特定領域研究ではその一部を継続実施すると同時に、これまでに蓄積されたデータを総括し、新石器時代から青銅器時代に至る遊牧民ケルン墓の編年を構築した。もう一つのフィールドは、アラビア半島である。ここでは広域踏査を実施し、比較資料の収集に努めた。

調査では、中東セム化の第一波となったマルトゥ・アムッルの考古学的足跡を確認し、その墓域組成について検討すること、これを基にマルトゥ・アムッル問題に新しい展望を拓くこと、を目指した。そのため、ビシュリ山系の調査を最優先し、ジャフル盆地とアラビア半島の調査は補足的に実施した。

## 4. 研究成果

先述した三つの目標に対応して、以下のような成果が得られた。第一は、ビシュリ山系における青銅器時代遊牧民の考古学的足跡、すなわちケルン墓群の存在を明らかにしたことである(図1)。これによって、粘土板文書中の間接的示唆に過ぎなかったマルトゥ・アムッル問題を考古学的研究の俎上に載せることが可能となった。



図1

第二は、上記ケルン墓群の墓域組成を解明したことである。ビシュリ山系の中期青銅器時代ケルン墓群は、少なくとも3階層以上の墓域組成を持つと考えられる(図2)。すなわち、「基本線分」、「ケルン墓群」、「ケルン墓群複合体」がそれであるが、これは遊牧民固有の分節的社会構造(系族、氏属、部族)に対応している可能性が高い。だとすれば、ビシュリ山系の中期青銅器時代ケルン墓群を造営したマルトゥ・アムルの社会はすでに部族制を備えていたことになるであろう。墓域組成の分解を基に彼らの社会構造を透視し得たことは、大きな成果である。

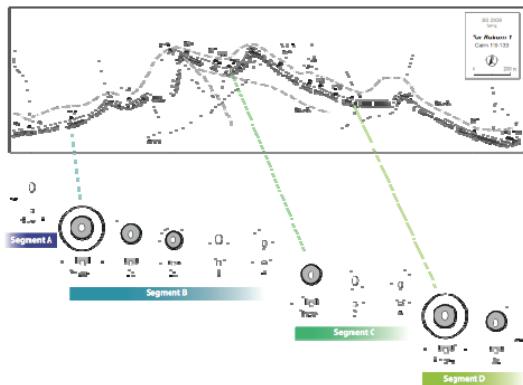


図2

第三は、ジャフル盆地の先史遊牧民ケルン墓編年という枠組みを得たことによって、上記墓域組成の成立過程を明らかにしたことである。ビシュリ山系の中期青銅器時代ケルン墓群は、西アジアの青銅器時代ケルン墓群の中でも最も北に位置し、年代的にも最も新しく、おそらくはそれゆえに、3階層以上の階層性を持つ大型ケルン墓群として唐突に出現したと思われる。その背後には、同時代マリ王国との接触・人的環流が想定されよう(図3)。従って、定住域における首長制・王制の成立が周辺乾燥域における遊牧民社会にも投影し、その中で遊牧民固有の分節的社会組織、すなわち部族制が形成されていったものと考えられる。

Northwest Spain		Mediterranean	
Site	Material	Site	Material
1.1	...	1.1	...
1.2	...	1.2	...
1.3	...	1.3	...
1.4	...	1.4	...
1.5	...	1.5	...
1.6	...	1.6	...
1.7	...	1.7	...
1.8	...	1.8	...
1.9	...	1.9	...
1.10	...	1.10	...
1.11	...	1.11	...
1.12	...	1.12	...
1.13	...	1.13	...
1.14	...	1.14	...
1.15	...	1.15	...
1.16	...	1.16	...
1.17	...	1.17	...
1.18	...	1.18	...
1.19	...	1.19	...
1.20	...	1.20	...
1.21	...	1.21	...
1.22	...	1.22	...
1.23	...	1.23	...
1.24	...	1.24	...
1.25	...	1.25	...
1.26	...	1.26	...
1.27	...	1.27	...
1.28	...	1.28	...
1.29	...	1.29	...
1.30	...	1.30	...
1.31	...	1.31	...
1.32	...	1.32	...
1.33	...	1.33	...
1.34	...	1.34	...
1.35	...	1.35	...
1.36	...	1.36	...
1.37	...	1.37	...
1.38	...	1.38	...
1.39	...	1.39	...
1.40	...	1.40	...
1.41	...	1.41	...
1.42	...	1.42	...
1.43	...	1.43	...
1.44	...	1.44	...
1.45	...	1.45	...
1.46	...	1.46	...
1.47	...	1.47	...
1.48	...	1.48	...
1.49	...	1.49	...
1.50	...	1.50	...

図3

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 31 件)

1. Fujii, S., T. Adachi, H. Endo, K. Nagaya, and K. Suzuki (2010) Archaeological investigation at the Tor Rahum Cairn Field 1 on the northwestern flank of Mt. Bishri. *Al-Rafidan* 31: 101-107. 査読なし

2. Fujii, S., K. Suzuki, and K. Inoue (2010) An archaeological survey of bronze age cairns in the northwestern flank of Jabal Bishri. *Al-Rafidan* 31: 144-151. 査読なし

3. Fujii, S., T. Adachi, K. Nagaya, K. Suzuki, and K. Inoue (2010) An archaeological survey and sounding of bronze age cairn fields in the northwestern flank of Jabal Bishri. *Al-Rafidan* 31: 163-168. 査読なし

4. 藤井純夫・足立拓朗 (2010) セム系部族社会の形成：シリア、ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群の第5～7次調査, 第17回西アジア発掘調査報告会報告集: 76-81, 査読なし

5. 足立拓朗・藤井純夫 (2010) シリア、ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群出土の貝製・ファイアンス製ビーズ製品の年代について, *オリエント* 52/2: 93-107, 査読あり

6. 足立拓朗・藤井純夫 (2010) シリア、ビシュリ山系北麓トール・ラフォーム=ケルン墓群出土の青銅剣の年代とその意義, *西アジア考古学* 12 (印刷中) 査読あり

7. Fujii, S., T. Adachi, and K. Suzuki (2009) The second field season at Rujum Hedaja 1. *Al-Rafidan* 30: 180-187, 査読なし

8. Fujii, S., T. Adachi, and K. Suzuki (2009) The soundings of the Hedaja cairn field, the northwestern flank of Jebel Bishri. *Al-Rafidan* 30: 216-223, 査読なし

9. Fujii, S. (2009) A brief sounding at Rujum Hedaja 1. *Al-Rafidan* 30: 139-142, 査読なし

10. 藤井純夫・足立拓朗 (2009) ルジュム・ヘダージェ1遺跡：ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群の調査, 第16回西アジア発掘調査報告会報告集: 70-75, 査読なし

11. 藤井純夫 (2009) 遊牧部族の形成：カア・アブ・トレイハ西遺跡におけるケルン墓造営集団の分層化,セム系部族社会の形成 平成 19 年度研究報告: 91-92, 査読なし

12. Fujii, S. (2008) The general survey of pre-Islamic burial cairns in the northern flank of Jabal Bishri. *Al-Rafidan* 29: 136-138, 154-156, 査読なし

13. 藤井純夫・足立拓朗 (2007) 2007 年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ, Newsletter セム系部族社会の形成 7: 1-5, 査読なし

14. Fujii, S. (2006) Wadi Abu Tulayha: A preliminary report of the 2005 spring and summer excavation seasons of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 50: 9-32, 査読なし

15. 藤井純夫 (2006) 定住化遊牧民の集落内氏族配置と墓地・井戸の分有関係：ヨルダン南部、フセイニーエ村の事例研究, 西アジア考古学 8: 153-162, 査読あり

16. 藤井純夫 (2006) セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究, Newsletter セム系部族社会の形成 2: 5-7, 査読なし

[学会発表] (計 17 件)

1. Fujii, S. and T. Adachi, Archaeological investigations of bronze age cairn fields in the northwestern flank of Mt. Bishri, Syria, International Symposium: Formation of Semitic Tribal Communities, Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria 2009.11.21, Sunshine Hall (Tokyo).

2. 藤井純夫・遠藤仁, セム系部族社会の形成：シリア、ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群の第 5~7 次調査(2009), 第 17 回西アジア発掘調査報告会, 2010. 3. 27, サンシャインシティ文化会館 (東京都)

3. 藤井純夫・足立拓朗, ルジュム・ヘダージェ 1 遺跡 - ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群の調査, 第 16 回西アジア発掘調査報告会, 2009. 3. 14, サンシャインシティ文化会館 (東京都)

4. 藤井純夫・足立拓朗, ビシュリ山系北麓ケルン墓群の年代と考古学的意義, 日本西アジア考古学会第 13 回大会, 2008. 6. 15, 慶応大学 (東京都)

5. 藤井純夫, ビシュリ山系北麓のケルン墓調査, 日本オリエント学会第 50 回大会, 2008. 11. 2, 筑波大学 (茨城県)

6. 足立拓朗, 古代西アジア青銅製腕輪の編年と流通に関する一考察 - ヒダージェ 1 = ケルン墓群出土の丸端部腕輪を中心にして, 日本オリエント学会第 50 回大会, 2008. 11. 2, 筑波大学 (茨城県)

7. 藤井純夫, セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究：平成 17-18 年度の総括, 第 3 回シンポジウム：セム系部族社会の形成 - ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究, 2007. 3. 25, サンシャイン文化会館 (東京都)

8. 藤井純夫, ヒツジ遊牧の起源：ヨルダン南部ジャフル盆地の調査から, 第 18 回進化人類学分科会シンポジウム, 2007. 6. 16, 京都大学 (京都府)

[図書] (計 2 件)

1. Fujii, S. and T. Adachi, (2010) Archaeological investigations of bronze age cairn fields in the northwestern flank of Mt. Bishri, central Syria. Ohnuma, K. S. Fujii, A. Tsuneki, Y. Nishiaki, and S. Miyashita (eds.) *Formation of Semitic Tribal Communities in the Bishri Mountains: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria. Al-Rafidan special volume*: 61-77.

2. 藤井純夫・足立拓朗 (2010) ケルン墓群の分布と部族・氏族の相関「紀元前 3 千年紀の西アジア - ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る」大沼克彦・西秋良宏編、147-157 頁、六一書房。

[その他]

ホームページ等

<http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryuiki/gaiyou/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤井 純夫 (FUJII SUMIO)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：90238527

### (2) 研究分担者

なし

(3)連携研究者

足立 拓朗 (ADACHI TAKURO)  
中近東文化センター附属博物館・研究員  
研究者番号：90276006  
(H17→H19:研究分担者)

徳永 里砂 (TOKUNAGA RISA)  
慶応大学・文学部・非常勤講師  
研究者番号：00458936  
(H19:研究分担者)